

# 平成30年度 第3回人権教育学級

日時：8月10日（金）13：30～15：30

場所：ビーコンプラザ 国際会議室

演題：「人権文化豊かなまちづくりー阪神・淡路大震災が教えたものー」  
～部落差別解消推進法が求めるもの～

講師：全国隣保館連絡協議会 常任顧問・事務局長 中尾 由喜雄 さん



<講師の中尾由喜雄さん>

## ●講師プロフィール

1966（昭和41）年 兵庫県芦屋市役所 入所  
1975（昭和50）年 芦屋市立宮川会館（現 上宮川文化センター）配属  
1989（平成 1）年 全国隣保館連絡協議会 事務局長  
1994（平成 6）年 全国隣保館連絡協議会 顧問  
2002（平成14）年 全国隣保館連絡協議会 会長  
2011（平成23）年 全国隣保館連絡協議会 常任顧問・事務局長

現在 全国隣保館連絡協議会 常任顧問・事務局長  
全隣協近畿ブロック 参与  
兵庫県隣保館連絡協議会 顧問

## ●講演概要

～ 部落差別解消推進法が求めるもの ～

「部落差別解消推進法」が施行され、間もなく2年となります。  
この法律の意図するところを、震災の出来事を通して話します。



2011年3月11日午後2時46分、東北地方を襲った大地震  
大きな揺れと大津波による死者・行方不明者は1万8千人を超え、  
原発からの放射能漏れが今も広範囲にわたり住民の生活を脅かしています。  
そして、まだ、記憶に新しい一昨年4月の熊本地震や、相次ぐ大水害・・・  
人知の及ばない天災の脅威とそれにもまさる人災による被害  
天災は避けることはできません。でも、人災は少なくすることが出来ます。

阪神・淡路大震災 あれから23年が過ぎました。  
震災は忘れることの出来ない悲しい出来事です。  
でも 直後から隣近所が助け合い励ましあった姿は  
人と人とがささえ合いながら生きていく大切さを教えてくれました。  
地震直後から避難所となった私の隣保館(※)には同和地区内外の住民400人と  
聴覚障害者7人が避難し数ヶ月にわたって生活をともにしました。  
日頃 私たちが合言葉にしている人権の尊重・・・  
これが震災という非日常の中でどう生かされたのか  
一人ひとりがかけがえのない人間として実感するために何ができるのか  
避難所でのいくつかの出来事を通して考えてみます。

※ 隣保館とは、同和地区に設置された福祉の向上や生活相談、地域社会での  
人権啓発や住民交流の拠点となるコミュニティーセンターです。

## ■はじめに

### ■震災と人権 ～激震地における被災状況の実態からみえること～

- 同和地区の死亡率は全体の2倍にのぼった。
- 6434人の死亡者のうち、高齢者が50%を超えた。
- 「障がい者」の死亡率や負傷率は？
- 多くの被害が集中したのは不良環境地区といわれたエリアだった。

### ■それでも、同和対策事業で同和地区の命と財産は一定程度守られた。

- 同和地区家屋の倒壊率（全壊・半壊）は、全体の平均とほぼ同じ

### ■阪神間では、同和対策による地域の環境改善で、いち早く安全・安心のまちづくりが実現できた。

### ■地震発生当日から地区内外住民400人が隣保館に避難

- 最も被害率が高かった芦屋市（死者443人、倒壊家屋17100世帯）
- でも地区の被害はほとんど見られず、周辺の被害は目を覆うほどの惨状
- 避難者の約半数は地区外住民・・・心配された差別事件や喧嘩・トラブル

○炊き出しから始まった地区住民の世話活動あれこれ

○阪神間で14館が避難所となったが、すべての隣保館で同じような報告がされた。

■地区の全国的な団体が、被災住民への救援・救済活動はもとより、いろいろなボランティア活動に取り組んだ。

○心のこもった炊き出し、入浴サービス、洗濯サービス・・・



■一方通行の人権問題はありません

○昔から、地区が地区外にさまざまな支援活動を行ってきた。

■聴覚障害7人の避難者とともに

○地震当日、一人の聴覚障害者が隣保館を訪ねてきた。

○芦屋市内で避難所生活を余儀なくされた聴覚障害者7人が隣保館に避難

○聴覚障害者が不便のないように出来る限りのことをやったつもりだったが、その人の特性が分からなかったために様々な行きちがいがあった。しかし、日数を重ねるうちにお互いが理解できるようになった。

○同室に避難している高齢者と2～3日後には会話ができるようになった。

■人権文化豊かなまちづくりとは、

「差別によって切られている人と人とのつながりを復活させていく営み」

- ・一方通行だけでは、人権文化は育たない。相手と向き合うために人権の勉強が大事
- ・差別は、人と人とのふれ合い・出会いを少なくする。
- ・人間は、人間として高まっていきたいという願いがある。一生のうちにどれだけの出会いがあるか。人と人とがつながっていく町づくりが必要である。



<中尾さんの講演を熱心に聞く参加者>